

会社沿革(日産化学のあゆみ)

当社は、1887年にわが国初の化学肥料会社として誕生し、「利農報国」を創業の精神とした先駆者たちの熱意と努力により、国内の食糧生産の飛躍的な増加に貢献しました。以来、旺盛なパイオニア精神を受け継ぎ、革新的な技術を追求することで、新しい事業へ挑戦し続けてきました。

1887年～

1887年 東京人造肥料会社
1889年 日本舎密製造会社
1910年 大日本人造肥料

東京人造肥料会社誕生のきっかけは、消化酵素タカジアスターゼの発見者である高峰讓吉博士が、英国留学中に当時最先端の化学肥料製造技術に接し、深い感銘を受けたことです。帰国後、財界の重鎮であった渋沢栄一ならびに益田孝等の賛同を得て、日本の農業を根本から変える画期的な事業を立ち上げました。

工場立地には、原料の搬入、製品の搬出に際し水利の便が良い、現在の東京都江東区大島1丁目、通称「釜屋堀」の土地が選定され、1888年に過磷酸石灰(肥料)の製造を開始しました。

過磷酸石灰の主原料は燐鉱石と硫酸であり、当社は設立時から硫酸の自社生産とその誘導品展開を目指していました。1896年に硫酸工場を新設、その後ソーダ製品の生産も開始し、製品は工業薬品分野へと広がっていきました。のちに合併する日本舎密製造会社(現・小野田工場)は、1889年に設立され、硫酸とソーダの製造を手掛けていました。



▲釜屋堀工場



▲1891年当時の広告



▲吠に詰められた過磷酸石灰

1923年～

1923年 (3社合同)
1937年 日産化学工業 (日産コンツェルン加入)
1949年 日産化学工業 (油脂部門分離)

20世紀前半、国内企業のさまざまなM&Aが繰り広げられるなか、当社は1923年の「3社合同」、1937年の「日産コンツェルン加入」という転機を迎えました。

「3社合同」とは、硫酸・ソーダなどを製造する関東酸曹、日本化学肥料(日本舎密製造会社から改称)の2社と大日本人造肥料(存続会社)の合併です。

事業の多角化を進めていた当社は、創業50周年となる1937年、日産コンツェルン傘下に入り、社名を日産化学工業に改称しました。日産コンツェルンは、久原鉱業所(現・JXTGホールディングス)を引き継ぎ日本産業に改称した新興財閥の1つで、鉱業部門の日本鉱業、機械部門の日立製作所、自動車部門の日産自動車などがグループを形成していました。

その後の変遷を経たのち、戦後の企業再建整備法を根拠とする分割指令のもと、1949年に油脂部門を日本油脂(現・日油)として分離し、新たな日産化学工業のスタートを切りました。

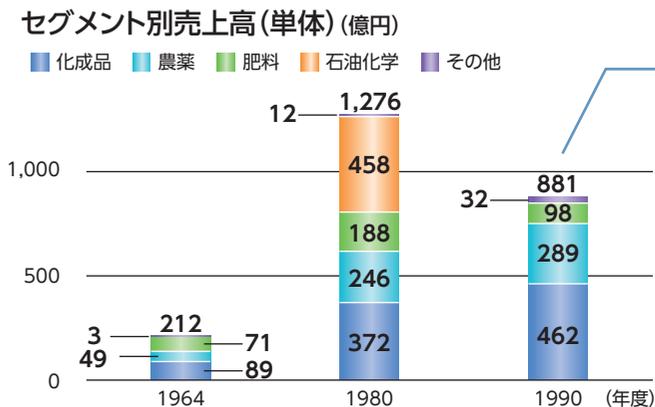


▲富山工場電解設備



▲富山工場硫酸倉庫

「1928年、富山工場でアンモニアと硫酸の一貫製造を開始しました。アンモニアは水の電気分解による製法で、1967年まで続けられました。」



現在では、情報通信、ライフサイエンス、環境エネルギー、基盤の4つの事業領域で、グローバルに製品・サービスを提供するとともに、歴史のなかで培ってきたコア技術に磨きをかけ、社会の要請に沿った製品の創出にまい進しています。

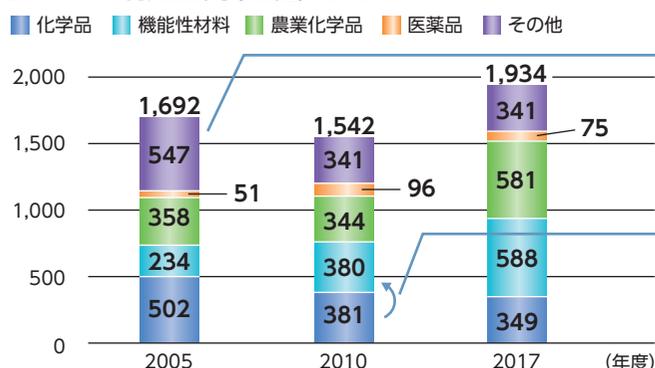
1965年～	1989年～
<p>1965年 石油化学事業へ進出</p> <p>1988年 石油化学事業から撤退</p> <p>1950年代に入り、国内では石油化学製品の輸入が拡大し、国産化の機運が高まるなか、当社は、1965年に日産石油化学を設立し、高級アルコールの生産を皮切りに、石油化学事業への進出を果たしました。</p> <p>しかし、石油化学業界は、1970年代の2度にわたるオイルショックの影響などにより構造的な不況を迎えました。当社は、事業再建を図りましたが採算改善のめどが立たず合理化に着手。塩ビ事業を東洋曹達工業（現・東ソー）、高級アルコールおよび合成洗剤事業を協和発酵工業（現・KHネオケム）、ポリエチレン事業を丸善石油化学へ譲り、1988年に石油化学事業から撤退しました。</p> <p>念願の石油化学事業への参入でしたが、収益に寄与した時期は短く、むしろ大きな赤字をもたらす結果となりました。しかし、この事業を手掛けたことにより、従来の化学品とは異なった技術思想が社内に浸透し、その後のファインケミカルなど新技術や新事業の誕生と発展につながりました。</p>	<p>2018年 日産化学</p> <p>1989年、「農薬・医薬などのハイテク分野」と「機能製品・化学品などの伝統ある技術分野」を両輪として「研究開発が主導する特色ある価値創造型企業」を目指し、5カ年の中期経営計画をスタートさせました。</p> <p>苦境のなかでも継続してきた研究開発投資の成果が現れ、1990年代初頭までに、多数の農薬を上市、1990年代後半には、液晶配向膜材料が大きく伸びる一方で半導体分野に参入しました。2000年代に入り、高コレステロール血症治療薬リバロ®が大型商品となり、また、世界最大の除草剤ラウンドアップ®の日本における独占的な販売権を取得しました。その後も農薬の新剤などが生まれ、2013年には現在の主力製品のひとつである動物用医薬品原薬フルララネルの出荷が始まりました。</p> <p>そして2018年、当社はすでに高品質、高機能なものづくりを意味する「工業」の枠を超えて事業を展開し、将来に向かってその流れを加速させることから、この姿勢を明確化するため、社名を日産化学に変更しました。</p>

主要製品の上市

1951年	スノーテックス®(コロイダルシリカ)	1994年	ランデル®(血圧降下剤)
1964年	メラミン		パーミット®(トウモロコシ用除草剤)
1965年	ハイライト®(殺菌消毒剤)	1998年	ARC®(半導体用コーティング材)
1978年	テピック®(エポキシ化合物)	2002年	ラウンドアップ®(非選択性茎葉処理除草剤)
1979年	高純度硫酸	2003年	リバロ®(高コレステロール血症治療薬)
1984年	タルガ®(畑作用除草剤)	2005年	アドブルー®(高品位尿素水)
1985年	高純度液安・安水	2008年	ライメイ®(殺菌剤)
1987年	高純度硝酸	2009年	スターマイト®(果樹・野菜用殺ダニ剤)
1989年	サンエバー®(液晶配向膜材料)	2010年	殺菌剤チフルザミド買収
	シリウス®(水稲用除草剤)		オラクル®(土壌病害用殺菌剤)
1991年	サンマイト®(果樹・野菜用殺ダニ剤)	2013年	アルテア®(水稲用除草剤)
			動物用医薬品原薬フルララネル初出荷

注)ARC®はBrewer Science, Inc.、アドブルー®はドイツ自動車工業会の登録商標です。

セグメント別売上高(連結)(億円)



肥料を含む。
肥料は、肥料事業の分社化に伴い、
2007年度より非連結

無機材料を化学品から
機能性材料に移管

注)セグメントは現在の名称にて表記
注)その他には、卸売、調整額を含む